

となるものを一つ決めて、それを徹底的にやりこなすことが、実力養成の一番の近道だということである。

「二兎を追う者は一兎を得ず」ということわざにもあるように、あれもこれもと間口をひろげてしまうと、どれもが中途半端に終わり時間をかけた割には力がつかない。最近のように参考書一つをとっても似たようなものがたくさん出まわっていると、つい目映りがして全部揃えておかないと落ち着かないといったことになりかねないが、そんなことをしても却って混乱し、焦りや迷いが増すだけである。

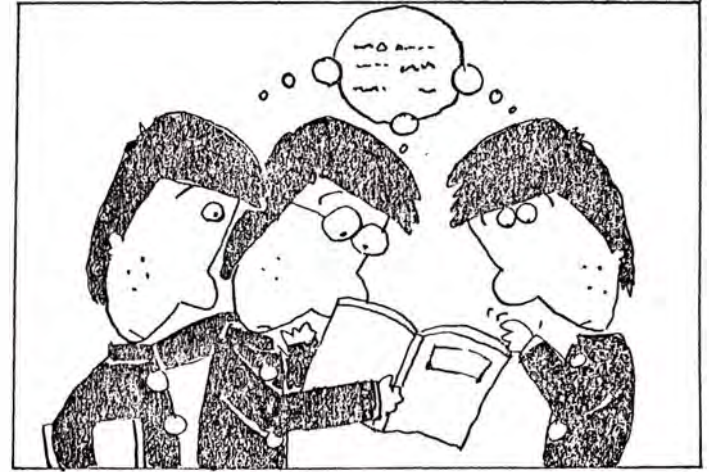
私の中学時代の恩師に上田誠二という先生がいる。ご高齢にも負けず、今なお教育者の道に励んでおられる。生徒に対する思いやり、熱のこもった授業、どれをとっても教育者の鏡のような先生であった。私が今日あるも先生に抛る所がきわめて大きく、私が最も尊敬する師の一人である。その先生が、あるときご自分の中学生(旧制)の頃の話をももらしたことがあった。なんでも家が貧しくて、中学にはなんとか行かせてもらったが、参考書の類は一切買ってもらえなかったそうである。仕方がないから、来る日も来る日も教科書だけを相手に、読んだり、書いたり、眺めたりを繰り返していたという。そうしたらいつの間にか教科書を隅から隅まで憶えてしまい、結果的にはむしろ参考書に不自由しない裕福な家庭の生徒たちよりもずっと好成績を収めることができたそうである。結局中学時代を通じて買ってもらったのは英語の辞書一冊だったと

いうから、当時の私たちにとってもたいへんな驚きであった。

しかしこの話はその後の私にとって大いに役立った。教科書だけというわけにはいかなかったけれど、一つのことを徹底的にという考えを見習ったおかげで高校入試、大学入試も無事乗り切ることができた。私が大学受験をしたのもう二〇数年も前のことだから、当時と今とは入試制度や教科の内容など分変わってしまったのはいるが、こと勉強法の基本というような普遍的なものはいつの時代も変わりはない。

当時の高校の数学は、「解析Ⅰ」「解析Ⅱ」「幾何」「一般数学」という分かれ方をしていて、大抵の人は解析Ⅰと解析Ⅱで受験をした。私は当時定評のあった岩切晴二先生の『解析精義(上、下巻)』という参考書を徹底的に勉強した。例題と問題が交互に並び、各分野ごとの問題量も手頃でヒントも付いて、しかも問題タイプもバラエティに富みよく整理もされていたので、退屈せずにとんどん独習できた。確か学校で一年間でやる分(解析Ⅰの分)を半年位でやり終えたように記憶している。別に私が優秀な生徒であったわけではなく、誰でもその気になってやればその位のことはいくらでもできるのである。事実そういう生徒は他にも何人もいた。

当時私のいた高校(長野県の松本深志高校)は、自治の精神、自主独立の気風が旺盛で、学校のことはもちろん自分自身のことについても自分でどんどん解決していくことが当たり前になっていた。勉強にしても、中にはガツガツ受験勉強ばかりをしている生徒もいないではなかった



基本書一冊を徹底的にやりぬこう。

が、大多数は、よく学びよく遊ぶの方であった。そんな雰囲気だったので、自主独立の一面生徒間のコミュニケーションも実によく、わからないことがあると何でもよく教え合い、お互いに切磋琢磨したものである。その名残りはいまだに続き、「七日会」などと呼ばれて郷里は郷里、東京は東京で毎月一度は必ず仲間が集まり話に花を咲かせている。

そんなわけで、勉強も生徒同志で気軽に解決できたのでずい分はかどった。最近こういったことがずい分少なくなったときが、これは学力向上の点からも、友だちづくりの点からも、お互いにとってたいへんなマイナスである。

解析精義の上巻をマスターできたことによって私の中には一本の柱ができた。柱ができ

るとどんな問題をもパッとヒントがひらめくのでたいへんな自信になった。かなり高度な問題集をみても、歯が立たない問題はそう多くはなかったので、柱づくりをしたときは比較にならない位のスピードで仕上がった。同時に相当高度の問題も次々とマスターできたので実力の方も大いに上がった。

他の教科についても同様であった。例えば化学は、津田栄先生の書かれた教科書中心で十分間に合ったし、日本史も井上光貞先生の書かれた参考書がたいへん読み易く、また大事なところはゴシックで表わされていたので頭にも入り易くこれまた一冊で十分足りた。

たいへん手前味噌な話を偉そうに並べてしまったが、だからといって決して私が模範的な受験生であったわけではない。私より上手はたくさんいたのである。たとえば一冊の参考書がその人間の将来を決定するほどの取り組み方をした生徒もいたのである。

現在東京外国語大学の教授の中嶋嶺雄君はその一人である。ついこの間も朝日新聞連載の「新入国記」で紹介されたほどの活躍ぶりであるが、その彼を今日ならしめた一つのきっかけは、受験時代に使った一冊の世界史の参考書（秀村欣二著）にあったという。朱線の上に朱線を重ねるといった具合に、何回も読み返し、三〇〇ページ近い本をすっかり呑み込んでしまいうらいやったというから正に血肉と化したといえよう。結局そのことが世界を舞台に活躍する道に進ませる大きなきっかけになったというから参考書もばかにできない。目下彼は国際関係論の分野で、日

本を代表する学者の一人として活躍中であるが、当時使った参考書は、今もなお座右の書として机の脇に置いてあるそうである。

このように、たとえ受験勉強でも自然の理にかなった方法でやると、受験にとって好ましいばかりではなく、人生にとってもたいへん役立つのである。何事も一があってはじめて二があるのであって、一に無関係にいきなり三があるわけではないのだ。だから勉強の場合にもやはり一本の柱づくりからはじめることが肝心である。

3 「参考書」も生き物である

前の方でも少し触れたが、教科書や参考書に対してどういう意識で対処するかはたいへん重要である。一冊の参考書を自分の血肉と化してしまうような人たちは、あたかも自分の分身であるかのようにそれをみている。はじめはそうでなくても、何回も使っているうちにだんだん向こうの自身がこちらに移り、同時にこちらの情（心）も向こうに移入され、やがて一体となってしまうからである。

だから私はいつも生徒たちに、「教科書や参考書は生き物である」と言っている。「師」として

の立派な機能や力を持っている以上、死んだものとは決していえないし、むしろ生き物であると考えた方がより自然だからである。

もちろん生物学的には、参考書などは「生物」といわず、「無生物」ということになっていく。けれどもそれは飽くまでも生物学という一つの枠の中での話であって、そこからはみ出ることもが、あっても少しもおかしくない。

人間国宝の月山貞一さんは刀づくりの名人である。最近ようやく、「鉄の心」が読めるようになったという。こういう人にかかれば、鉄もさぞかし本望であろう。

「なんだかこのごろ、炉の中の鉄どもがね、真赤な顔して『そろそろ水で冷やす時間だよ』って、勝手にしゃべってくれんんですよ」（昭五七・一・七付朝日新聞）という月山さんの言葉のはしに鉄の本心がうかがえる。鉄もやはり生きているのである。

私もかつて一〇年間ほど大企業で鉄（正確には鋼）の研究をしたことがある。私の場合は月山さんとは違い熔けた鉄の方である。よく「ドロドロ」とけた鉄」という表現が使われるが、一六〇〇度を超える実際の精錬温度では、ドロドロというよりはむしろ、水のようにサラサラといった感じの方に近い。鉄の粗材としてのよしあしは、この精錬と、鋳型に注入されてから固まるまでのいわゆる凝固の過程で決まるが、その間の挙動の複雑さは想像を超え、肝心なところは未だに神秘のベールにつつまれたままである。そういう難物を相手に毎日ならめっこをしていると、

合格への道は開ける

● 受験期をバラ色にする法

● 百瀬昭次



学陽書房

昭和59.6.20発行